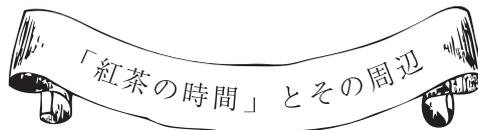


きもちは、 言葉を さがしている



第 38 話

水野 スウ

庄内・鶴岡へ

2019年9月、山形は庄内・鶴岡へはじめておはなしの出前に行きました。今年の春まで石川にいた菊地くんが、今は鶴岡に住んでいるので、何気に、9月に私、仙台に行くよ、と言ったら即、「スウさん、隣っす!」と。あら、隣なの? じゃ会いにいいかな、そうつぶやいたことが瓢箪から駒になり、仙台出前の翌日、本当に鶴岡におはなしに行くことになったのです。ただしつぶやき時点では、「隣」が高速バスで2時間半かかる距離だとはまったく知らず(笑)。(菊地くんの物語は、マガジン37号に。<https://www.humanservices.jp/magazine/number37>)

仙台から少し足を伸ばして、菊地くんや彼の友人たちに会えたらいいな、ほどのきもちでいたところ、いつのまに、菊地くんは鶴岡生協さんと協力しあってのおはなし会計画をたててくれていました。山形の大学を出て、鶴岡ではたらき、好きなダンスで人

と人をつなげてきた菊地くん。住むところをどこに移しても、鶴岡とはずっとダンスでつながり続けてきたとはいえ、再びの鶴岡暮らしはたった数ヶ月前から。にもかかわらず、彼の、ひとネットワークをつくる力はあいかわらず本当にたいしたもんだ、と舌を巻きました。

それにしてもどうして生協さんとそういう運びになったかという。鶴岡生協内では以前から組合員さんたちによる憲法カフェがひらかれていて、その中で私の書いた『わたしとあなたの・けんぼうBOOK』の本をテキストがわりに読み合っていることを、菊地くんが発見したのです。憲法カフェのメンバーさんたちは、映画「不思議なクニの憲法」上映会をした時から、映画に出演していた私の「12条する」発言に心をとめ、いつかこの人を呼びたいね、だけど遠いから難しいよねえ……と話していたのだとか。そんなご縁+絶妙のタイミングで菊地くんが憲法カフェに参加して、私が仙台に行くことを

知らせ、そこから互いにできることを持ち寄ってのおはなし会準備が進んでいったのでした。

出前はコラボ

私にとっておはなしの出前に行く、ということは基本的に、声をかけてくださる方、つまりご注文依頼主とのコラボレーション、協働作業です。今回は注文主と出前人のコラボ度が格段に高かったので、今号のマガジンではご注文主の菊地くんがFacebookに投稿してくれたレポートと誌上コラボしながら、おはなし会当日までを振り返ってみたいと思います。

まずは、当日までのいきさつを菊地くんから。若者言葉で綴られた文章が、私にはとても新鮮です。

菊地くん wrote:

今年の4月まで石川県に暮らしていた自分に、「紅茶の時間」や「ピースウォーク」「ベテランズ・フォー・ピース」などを通じて沢山のピース仲間・すてきな先輩たちと出逢うきっかけをくれた、恩人である、スウさん。ちゃんと関わったのは、わずか半年くらいだったけど、まちがいなく、自分が未来を考えるための視点や気づきを与えてくれた、スウさん。そんなスウさんが、仙台に来ると聞いたので「隣っす」と言って来てもらいました。

6月の地震があった日に、鶴岡市にもどって、その月に、鶴岡生協の中で活動している「憲法カフェ」におじゃまさせてもらいました。憲法っぽい感じ皆無で、素性の知れない自分をあたたかく迎えてくださり、スウさんのことを話すと、皆さんとても前向きに考えてくださって「ぜひ、来てお話もしてもらおう！」と動き出した6月。

鶴岡生協で憲法カフェの担当をしているSさんと、たった2人の“きもちことば企画委員会”を発足(笑)。チラシづくりも初めて、段取りも不安ではありましたが、(きっと、Sさんや憲法カフェの皆さんのこれまでの活動のおかげで)鶴岡生協さんが、後援をしてくださり、“スウさんのでまえ紅茶@つるおか『ほめ言葉のシャワーから平和へ』”という会を開催することができました。

菊地くんからのリクエスト

さっき、出前はコラボ、と表現しましたが、おはなしの出前に行くときはいつも、私の伝えたいことだけ一方的に語るのではなく、できるだけご注文主からのリクエストを聞かせてもらって、そこに私の伝えたいことをブレンドしてお届けしたい、と思っています。とはいえ、誰もが具体的なリクエストを出せるとは限らないので、その場合はタイトルと一緒に決めて、あとはこっちにお任せメニュー、となることが実際には多いです。

でも、鶴岡の場合は違いました。菊地くんが、私のしていることをすでに知ってくれていて、私の本も読んでいるし、紅茶の時間やピースウォーク金沢のアクションにも参加してくれている。なので、鶴岡で話してほしいことを箇条書きで出してみてね、できるだけそれにこたえてお話するから、とあらかじめ、彼に注文をだしてくれるよう頼んでおきました。

やがて、菊地くんから届いたご注文リストは実に具体的。私の自己紹介をかねて、紅茶の時間のこと／ピースウォークのこと／ほめ言葉のシャワー／私がふだんしていることの話／話を聴くこと／透明なガラスのボウル／対話——平話——平和のおはなし／憲法13条／ふだんの努力の12条の話。それに加えて、「ほめ言葉のシャワー」と「しあわせまわし」を実際に参加者のみなさんと一緒にするワークも！これを2時間半枠でしてほしい、というものでした。

わ、なんと盛りだくさん。でもこれ、どこかで見覚えあり、と思ったら、あげられたキーワードはすべて、菊地くんも参加していた4月の藤沢の出前の時に出てきていたものでした。彼にとって、このワードがそれだけ印象的だったんでしょう。ただしあの時は3時間枠で、人数もそう多くはなかった。参加者は50人くらい、とうかがっていた鶴岡でこれを全部盛り込めるかどうかわからないけど、前泊するのでその時もう一度話しあって決めればいいね、とリクエストはいったん預かっておくことになりました。

その間、菊地くんは鶴岡のあちこちに顔を出して、

イベントのことをこんなふうにお知らせしてくれて
いたそうです。

菊地くん wrote:

大切にしたのは、「憲法」というフレーズを出し
すぎないこと。

すぐにSNSでイベント告知をせず、興味を持っ
てくれそうな方や一緒に話を聞いてほしい方のとこ
ろへ、なるべく足を運んで、直接はなしを聞いても
らうこと。

(理由の)一つは、憲法に興味がない人にも参加し
てもらいたかったのです。

例えば、子育てで忙しいおかあさんとか、今は学
校を休んでる途中の学生さんとか。“憲法”ってフレー
ズだけだと、憲法を勉強してない人には、少しプレッ
シャーになると思ったし、いちばん皆さんとシェア
したかったのは、“あなたもわたしも大切な存在”っ
ていうことだったから。

そして、なるべく足を運んで会いに行きイベント
のことを伝えたのは、スウさんが来てくれた後こそ、
本当のスタートだと思うので。鶴岡・庄内という、
この地域で、いろんな想いをもって活動している方
たちがいる。きっとお互いを知って、お互いの大切
さを確認し合ったら、これからも鶴岡・庄内で「ほ
め言葉のシャワーから平和へ」につながる活動をみ
んなの力を合わせて続けていけると思ったのです。

鶴岡生協さんへ

そうして迎えたおはなし会当日。鶴岡生協さん
のお店の2階にある、広い和室に集まってくれた50
人弱の方たちは、毎月の生協の憲法カフェのメンバ
ーさんや、生協の組合員さんはじめ、ちらしを見て
きてくれた人たち、菊地くんのダンスつながり、友
だちつながり、さらにそのまた知り合いつながり。
酒田でユニークな学習塾をひらいている菊地くんの
友人は、教え子さんと一緒に参加。親子で、ご夫婦で、
3ヶ月の赤ちゃんもいる。それから私のことを本で
知っていた人、Facebookつながりの人、新潟の関川
村から来てくれた私の友人とその友人などなど、年
齢層幅広く、文字通り多様な方々でした。

はじめてこの場所に足を運ぶ人たちが迷子になら

ないよう、憲法カフェのメンバーさんが、立て看板
をもって表に立ってくれていたり、会場に張り出さ
れた「水野スウさんようそこ鶴岡へ スウさんの
でまえ紅茶@つるおか『ほめ言葉のシャワーから平和
へ』」というタイトル看板もすてき。



あれ！「ようそこ」になってる！ と看板をつく
った後で気づいて、本番時には「そこ」の文字の上
に「こそ」が貼り付けられましたが、そのエピソード
もまた、会場を和ませてくれた1シーン。この場
を準備した生協サイドの方たちも本当に楽しみにこ
の日を待っていてくれたことが伝わってきました。
そのことを菊地くんはこんなふうに書いています。

菊地くん wrote:

実は、この日を迎える前の憲法カフェに、体調不
良で参加できず。皆さんにちゃんとお手伝いをお願
いできていなかったのにも関わらず、参加者の案内
係、紅茶を淹れる係、受付係……etc. Sさんはじめ、
憲法カフェの皆さんが、バッチリ準備をしてくれて
いました。本当に、自分ひとりでは絶対に出来なかつ
たな。とつくづく思うのです。

今回、憲法カフェの皆さんのスタッフぶりがどん
なにすごかったかは、参加された皆さんもうっすら
感じたのではないのでしょうか。

はじめて会場に来られる方が、迷わないように、
手づくりの案内板をつくってくださったり、当日の
お土産に、憲法の前文、12条、13条、25条とそれ
ぞれの口語訳を記載したプリントを準備してくれたり、
お菓子の袋一つひとつに「スウさんのでまえ紅
茶へようこそ」と一文字ずつスタンプを押してあっ

たり……と、この会を大切に考えていることが、本当によく伝わってくるものがたくさんありました。お世辞ではなく、すごいです。

おはなしのあらすじ@鶴岡

ところで、保留になっていた菊地くんからの盛りだくさんリクエストがどうなったかというところ……。お話会の前の晩、菊地くんからこのおはなし会に寄せる想いをじっくり聞かせてもらったら、そうか、やっぱりこのワードは全部必要なんだ、って思えたのです。それなら私は、その想いに応えたい。ということで、これまでマガジンで何度か書いてきたこととも重なりますが、当日私が菊地くんのご依頼にどんなふうにお応えしたのか、振り返りかねて、私が話したことのあらすじを順を追って書いてみますね。

36年前にわが家で紅茶の時間をはじめたわけ、それはほかならぬ私自身が、いのちを育てあう仲間を切実に求めていたからです。安心できる誰かに胸のうちを「話す」ことは、きもちをとき「放す」こと。毎週子連れのママたちが来て満員御礼、誰かれと夢中で話しまくったにぎやかな子育て井戸端時代の紅茶から、やがて、はやらない、静かな紅茶の時間へ。

そのころの紅茶にやって来た人たちの中には、心が折れそうだったり、しんどい気持ちを抱えている人たちも少なくありませんでした。そんな目の前の一人ひとりを、どうしたら大切にできるだろうと困惑して、考えて、私のしたこと、今もしている、3つのこと。

1番目は、その人にお茶をいれること。2番目は、その人が胸の内を話したいと思っているようなら、まっすぐな耳で、さえぎらず、横取りせず、先取りもせず、その人の話を聴くこと。たとえるなら、透明なガラスのボウルに水を張って、そこにその人から放たれた言葉が映り、それがその人自身に見える、というような聴き方でその人を受けとめたい、と思いました。

3番目は、その人には見えていない、その人のいいところを見つけたら言葉にしてすぐ伝えること。その時は、何ができるできない、といったdoの価

値観でその人を測らないように、beのいいところみつけを心がけました。紅茶の時間を続ける中で、どんな人も自分のことを身の丈に認めてもらいたいと願って生きているんだ、という普遍を、私が確信するようになっていったからです。

誰もが身の丈に認められたいと思っている。それは、誰もがそのように感じられる言葉を待っている、ということでもあると思いました。でもその言葉って、実はあなたもすでに受け取っているんじゃないだろうか、そう思って、15年ほど前から、自分が言われてうれしかった言葉、または言われたらうれしい言葉を、思い出して書いてもらう、というワークショップを全国で何度も重ねてきました。

集まった言葉たちを選び直して、母娘の協働作業でつくったのが、『ほめ言葉のシャワー』という手のひらサイズの冊子です。その冊子の最後のコラムに、「あなたがあなたである、というその存在は、ほかの誰ともとりかえることができません」と書いたのは、当時、ひきこもってしんどいきもちのまっ只中にいた娘でした。

贈りものの言葉のリレー

「あなたが言われてうれしかった言葉はなんですか？ どうか思い出して、折り紙に書いてみてください」とお願いする、「ほめ言葉のシャワー」のワーク。これまでに、幼稚園や学校の保護者会、不登校を考える親の会やDVサバイバーの人たち、市民グループ、お年寄りたち、といった数々の集まりで実際に出されたうれしい言葉をいくつもみなさんに紹介した後で、この日の鶴岡でも同じワークをしました。

全員分のを読める時間はないけど、早めに書けた人のを順に読みますね、というとき々に言葉の綴られた折り紙が手元に集まってきました。その場で読み手さんをつのって、書かれた言葉たちを一枚一枚読み上げていくのが、「贈りものの言葉のリレー」です。

読み手は、菊地くんの友だちで、酒田で塾をしている30代のTさんや、ご夫婦で参加していた30代の男性、遠い町からきたもう少し年上の女性。どの

読み手さんも、書いた人のきもちを大事にしながら、そこに書かれた言葉を生き生きと読んで、このリレータイムのライブ感におおいに貢献してくれました。

当日のリレーの中から、その一部を再現してみますね。カッコの中は、添えられた説明書き、またはあとから伝えてくれた言葉です。

「うめの～！（おいしい!）」

「おっ母、俺、おっ母の子でよかったよ」

「そげ がんばらなくていいあんねが～」（何かをしなくっちゃって焦ってた時、夫から）

「お母さんと誰かと比べることはできない、お母さんを嫌いになれない」

「生きることを選んでくれて 本当にありがとう」

「また、親子になろうね」

40年前、身長140センチの私。「小さいのは体だけでいい、心まで小さくなるな、今のままでいい」といわれたこと。

おじいちゃんの最期の言葉、「よく 来てくれたね」

実家に遊びに行くと、母が「今日はぼっかりもちもろだ～」とよろこんでくれること（ぼっかりもち、とは、思いがけなくおいしいものをもらったり、すてきなことがあった時にいう言葉）

86歳の母が、私に「おまえがいてくれて安心だ」と言ってくれた。

20代の時に父に言われたこと「家の中にいる時まで気を使わなくていいよ」

「話したくなかったら、話さなくていい」

「お父さんとお母さんの子どもでよかった」

「あ～～あ～～」（読みながら、どういうことかな？と思って会場でお尋ねしたら、障がいのあるお子さんが、お母さんにむかって話しかけた言葉だそうです）

「ママ。ばあば、ママのこと好きだって」（離婚して、母にすまないと思っていた時、わが子がいきなり母に電話して、「ママのこと、好き？」って聞いて、その答えがこれだった、とワークのあとで教えてもらいました）

「ケガをしたのが、お母さんでも妹でもなく俺でよかった」（この言葉は、今から10年前。3人でバトミントンをしていた時に障がいのある妹の振った

ラケットがお兄ちゃんに当たった時に、当時10歳だった息子さんが言った言葉だと、あとから知りました）

「言葉が思い浮かばなかった。ペロペロ。（と、舌の絵が描かれていて）うちの犬がペロペロしてくれてうれしかった」（おはなし会が終わった後で女の子がそっと手渡してくれた折り紙にこう書いてありました）

文字で読むのと、実際に4人の違う声で読みあげるのとは、空気感が違います。読むたびに、参加している人たちからため息がもれたり、笑ったり、おもわず涙ぐんだり、しあわせなきもちで胸がいっぱいになったりもする、その部屋中にあたたかい空気が満ちていく時間でした。

13条の発見

ワークと言葉のリレーのあとは、娘が憲法13条を発見する話です。『ほめ言葉のシャワー』の冊子がでて1年後の2009年、東京調布にある精神障がいの方たちの働くレストラン、クッキングハウスから「ほめ言葉のシャワーから平和へ」をテーマに、親子で語ってください、という出前注文をいただきました。娘は別に、平和のことを考えてこの冊子をつくったわけじゃなかったので、このお題で一体何を話したらいいんだろう……と困り果てたあげく、ひよっとしたら憲法にそのヒントがあるかもしれない、と初めて自分の意志で憲法を一から読んでみました。そうしたら、「国民は、すべて個人として尊重される」からはじまる13条に出逢ったのです！

その時、13条の「どんなひとにも個のひととして大切にされる」と、『ほめ言葉のシャワー』の最後のコラムに書いた自分の言葉、「あなたはほかの誰ともとりかえることができない」とが、娘の中でぴたりと重なったといいます。え?! 自分が書いたことって、ずっと前から13条が言っていることだったの？

それにしても、一体どうしてこんなことが憲法に書いてあるんだろう。そうか、戦争中、戦前と、この国には“個人”なんてなかったんだ。あの時代、何より大切なのは国や公おおやけであって、一人ひとりのい

のちは自分のものじゃなくて国のものだった。だから、国がまちがった方向に進んでいった時に、誰もそれを止めるすべをもたなかった。その歴史をくりかえさせないためには、私のいのちは私のもので、国にとって都合よくとりかえのきく部品じゃないよ、って心から思うことが必要なんだ。

戦後にできた憲法13条は、私が私のことを大切に思うこと、私らしく生きること、それを許しているだけじゃなくて、むしろ、私たち一人ひとりがそのように生きingことを求めている、ってことなんだと思う。

クッキングハウスのおはなし会で、娘が13条をそう読み解いた時、私はびっくりしました。言葉だけは知っていた13条に、そんなに深い意味があったなんて知らなかった！ と同時に、私も大きな発見をしたのです。紅茶の時間で、一人ひとりを大切にしたいと思って私なりにずっとしてきたことが、実は13条だった。誰でも身のたけに認めてもらいたいと願って生きている、その願いが「人権」であったことに、やっと気がつくことができたのです。

ふだんの努力の12条

だけど、いくら憲法にそう書いてあるからって、私たちの自由も権利も、一人ひとりが大切にされる平和な社会も、何もしないでそれが叶うわけじゃありません。この憲法が私たちに保障してくれている自由と権利は、私たちのふだんの努力でもってこれを保ちつづけなきゃならない、と13条の一つ手前の12条に書いてあります。

私たちが国のすることに対して、おかしいと思った時にはおかしいと声をあげて、国家が好き勝手に私たちの自由をとりあげたりしないよう、権力を持っている人たちに憲法を守らせなくちゃいけない。それが「12条する」こと。

不断の努力って漢字を見た時は、休みなしの努力じゃちょっとしんどい、と正直思ったけれど、考えてみたら、12条するって何もデモとか投票だけに限らないはず。自分のできることを、ちいさくても日々、普段から続けていったら、それは連続性を持って不断になっていくんだ、と考え直しました。

何より、12条する、の最初の一步は、13条を自分のものにして、自分自身を大切にすることです。それに加えて、憲法を知ること、こんな場を菊地くんと鶴岡生協の憲法カフェさんがつくってくれたことも、この場にあなたが参加していることも、どれも一つひとつはささやかだけど、あなたのしている確かな12条です。

広い意味では、子育てだって、絵本の読み語りだって。絵本には、想像力の翼をひろげる力があります。お子さんにいろんな絵本を読んであげて、その子の想像力が豊かになって、世界にはいろんな違いを持った人が生きていること、仲間外れにされたり差別されるのがどんなに悲しいか、感じることで育てる、本当の意味で平和を愛する子どもに育てる、そういうことだってとても意味ある、息の長い12条すること、だと思っています。

しあわせまわしのワーク

初めて知った憲法のことを、まだ知らない人に伝えることも12条です。でもその時は、平らに話す、を心がけるのがすごく大事。知らないなら教えてやる、みたいに上から目線でなく、決してえらそうにでなく。

戦争と暴力の反対語は対話です、とは社会学者のてるおかいつこ暉峻淑子さんの言葉。だとしたら、平らに話すこと(=平話)は、その対話を練習することです。対話——平話——平和は、ひとつながりだと思うので、今からちょこっと、平らに話す／聴く、の練習、をしてみましよう。

やりかたは、こうです。最近自分に起きた、ちっちゃなうれしいことを、2人1組になったお相手にほんの短い時間話してみる。お相手は、そのちっちゃなうれしい、をまっすぐに聴く。どんなちいさな話でも、あら、この人いい歳してこんなことでうれしいの？なんて顔しないで聴く。話す側が、ああ、今、自分の存在が大事にされてるな、ってきもちになれるような受け止め方で聴く。たとえば最近の私の、ちっちゃなうれしい、は、仙台に来る時に生まれて初めて、キスした新幹線を見れたこと(北陸新幹線は連結してないから、こんな図は見れない！ちなみに、これは帰りの大宮駅でとった証拠写真)。



そう、この手のちっちゃなうれしいを、まさかおとな同士で分け合うなんて普通はしないことだからこそ、貴重な経験。

笛の合図でどちらかが先に話し始めて、もう一度笛が鳴ったら、今度は話す人と聴く人が入れ替わります。

そう説明したあとで、さっそく「しあわせまわし」のワークをしてもらいました。知らない同士でペアを組んでもらったにもかかわらず、合図の笛の音とともに、一斉に話しはじめたそこから笑い声があがり、うん、うん、と大きくうなづく顔があり、笑顔の人、何を話しているのか互いに涙ぐむ人もいて。会場にまたしあわせな空気があふれました。

自分のうれしいを聴いてもらうってどんなきもちだったでしょう。自分は平らに話せていたかな、聴く時に相手を大切にできていたかな。この「しあわせまわし」は、自分のきもちを言葉にする練習であると同時に、相手を尊重していいいに聴く、平話と対話の練習でもあると思います。もっといえば、民主主義する練習、なのかもしれませんね。

2つのワークの意味

菊地くんのご依頼にお応えして入れた2つのワーク。依頼してくれたときのきもちを、菊地くんはこんなふうに書いてくれています。

菊地くん wrote:

今回、スウさんへのリクエストとして2時間半という限られた時間の中に、「ほめ言葉のシャワー」と「しあわせまわし」の2つのワークを入れてもら

いたい。という、かなり無理なお願いをしましたが、そこは、スウさん！ 本当に限られた時間の中に、この2つのワークを入れてくれました（拍手喝采！）

なぜ、このワークを入れたかったかという……初めて逢うひとたちが、次どこかで、また会ったときに、「あ、この前、スウさんの！」って言える関係をつくりたかったから。年代も環境も違うみなさんが集まるので、そういうのに関係なく、平らに話すというワークがあると、年上だから偉ぶったり、若いからオドオドしたりってことが無くなって、例えば、元気がなくて学校に行っていない学生さんなんかも、否定もされず、横どりもされず、まっすぐに話を聴いてもらえた。っていう、経験はちょっとした自信にもつながると思ったから。

やっぱり、同じ時間を共有するとき、話を聞いた。という、受動ではなくて、“参加した”とか、“一緒につくった”という、能動の部分があると、自分に沁み込む濃度がぜんぜん違って、お互いの距離もぐっと近づくと感じます。

うれしかったのは、親子で参加してくれたお母さんと娘さんが、2人で“しあわせまわし”をしていたこと。「できれば、一緒に来た人じゃない方」という設定でしたが、親子バージョンですごくいいなあ。としみじみ思いました。何を話していたのかはわかりませんが、親子で、まっすぐ話を聴く、安心してうれしかったことを話す。という、状況がどれだけあるのかな。いつもとちがう場だからこそ、実現したのだとしたら、やっぱり「場の持つちから」って有るのでしょうかね。

2つのワークの理由。もう1つは、やっぱりほめ言葉のシャワーをみんなで浴びたかった（笑）。意識して思い出さないと、うれしかった言葉ってなかなか思い出せないけど、誰も皆、嬉しいと感じた言葉を持ってる。忙しい毎日の中で、忘れてるけど「わたしもあなたもほめ言葉もらってる」「わたしの存在ってちっぽけなんかじゃない、一人ひとりが大切な存在だ」ってことを、みんなでシェアしたい。そんな風に思ったのです。

スウさんから、拒食症になった女の子が、2年経って自分のきもちを言葉にした時の話を聞いて、女の子のきもちが刺さるようで悲しかったのか。自分にも同じようなきもちがあることに気づいたのか。それとも、自分も子どもにプレッシャーを与えてるのかもしれない、と思ったのか。理由はわかりませんが……瞳を潤ませていたのは、1人や2人じゃありませんでした。

涙だけじゃなく、ほめ言葉のシャワーの読み回しのときの、うんうん、っていう顔や、酒田で学習塾をしている、Tさん（スウさんの大学の後輩）の表現豊かな読みかたで、笑う皆さんの笑顔。泣いたり笑ったり。自分を話したり（放したり）、相手の話をまっすぐ聴いたり。こんなにも感情のふり幅が大きくうごく2時間半は、あまりないように思います。

ピースウォーク開会宣言

再び、お話のあらすじにもどって……。金沢では毎春、平和を願う個々人の市民が集まって街を歩く、「ピースウォーク金沢」というイベントが19年間続いています。これも、仲間たちとの12条する、の一つ。今年、実行委員の一人になった菊地くんが、ピースウォーク金沢2019の開会宣言をしてくれました。彼が卒業した、北海道は士幌中央中学校の、菊池くんの先輩生徒さんたちがつくったすばらしい生徒憲章を、集まったみんなの前で讀んじてくれたのです。はじめの「人権の章」には、こう書かれています。

人間だから 私の命も心もたった一つ
 かけがえのないひとりとして 大切にされる
 あなたも人間だから わたしはあなたを大切に
 する

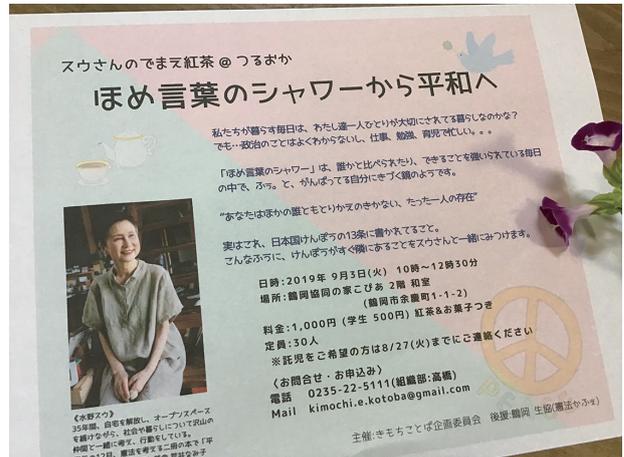
この生徒憲章を鶴岡でも紹介しながら、これって13条そのものですよね、と言いながら、私はそこで「13条のうた」を歌いました。こんな歌詞です。

♪ 誰とも ほかの誰とも とりかえっこできない
 あなたが生まれたその時から ひとつっきりの
 いのち
 あなたが大切にされ わたしも大切にされ

それが行ったり来たり ともに生きること

そして、締め言葉

おはなし会の締めは、菊地くんの担当。彼はいわゆる締めのあいさつを述べる代わりに、この日のちらしに書かれた言葉を読みあげました。



——私たちが暮らす毎日、わたし達一人ひとりが大切にされてる暮らしなのかな？ でも……政治のことはよくわからないし、仕事、勉強、育児で忙しい。

「ほめ言葉のシャワー」は、誰かと比べられたり、できることを強いられている毎日の中で、ふう。と、がんばってる自分にきづく鏡のようです。“あなたはほかの誰ともとりかえのきかない、たった一人の存在”

実はこれ、日本国けんぼうの13条に書かれています。

こんなふうに、けんぼうがすぐ隣にあることをスウさんと一緒にみつけます。

とてもいい締めの言葉。こうして読んでもらったことで、この日の目的を、私も含めその場にいる全員であらためて思い出し、共有できたからです。このちらしの言葉も、菊地くんが書いたもの。最後に菊地くんが、次週は、鶴岡生協さんでこの日のふりかえりの会、「ほめ言葉のシャワーから平和を、ふりかえってみっ会」というとくべつ憲法カフェをします、という告知もして、時間ぴったりにおはなし会が終了しました！

当日終わってから、菊池くんが「生協さんだけでは、僕だけでは、とてもこんなふうにはできなかった。すでに田おこしの行われていた田んぼに、この日またぐいとあらたに畝^{うね}をおこして土を耕した感じでした」と感想を伝えてくれました。胸にしみるうれしい言葉です。呼ぶ側もまた、コラボしていた。そこへ私がお届けものをした、ということだったんですね。

数日経ってから菊池くんが投稿してくれたFacebookのレポートはこんな言葉で締めくくられていました。

菊池くん wrote:

2時間半の中で、“わたしもあなたもほかの誰ともとりかえのきかない、たった一人の存在”ということ。わたしたちひとり一人が持っている『人権』をみんなで確認し合った、皆さんには、沁み込むメッセージだったように思います。

そして、やっぱり、スウさんが来た後こそ「ほめ言葉のシャワーから平和へ」の本番。そうじゃないと、スウさんが、わざわざ鶴岡にきてくれた、意味

が半減しちまう。せっかく、スウさんから上質のだしをもらったので、これから皆さんで、素材を持ち寄って、自分たちの身の丈に合わせながら、平和をつくっていきたい。そんな風に思えた、“TSIJ”、T(とんでもなく)S(すごく)I(いい)J(時間)(笑)でした。

以上、菊池くんと誌上コラボ、鶴岡に呼んだ側と鶴岡に届けた側、協働作業の双方向の記録でした。

実は菊池くん、おはなし会から数週間経った紅茶に「庄内でとれた新米をお届けにあがりました！」と突然現れて、私たちをびっくりさせました。そういえば、鶴岡生協さんが新米とれたら送ります、と言っていたっけ。

そのおかげで紅茶の仲間たちは、菊池くんの口から改めて鶴岡出前コラボの様子と、おはなし会の翌週に開かれた「ふりかえってみっ会」の話を聞くことができました。その日は集まった10人ほどの人がゆっくり自己紹介をして出前の日の感想を語り合ったとのこと。鶴岡出前をきっかけに、この庄内で次へと繋がっていく確かな手応えを感じさせてくれました。

